2020年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	田中 夕子
研究テーマ	平安時代後期における貴族の修善について—『小右記』『権記』を中心に—
研究概要	平安時代後期の信仰を明らかにすることを目的として、当時の人々が行った修善（作善。善業を積むこと）の内容を分析し、その意義を考察する。そのために平安時代の貴族の日記である『小右記』『権記』に記された修善の目的、内容を分析する。

1．研究活動の概要と研究成果	藤原実資『小右記』、藤原行成『権記』における仏事の記事は、自身の往生を目的とした記事は少なく、現世利益を祈ったものが中心であった。これら現世利益の祈願を目的とした仏事を指す言葉の一つとして「修善」という言葉が用いられていた。これは藤原道長『御堂関白記』と同様であった。 『小右記』『権記』では、『御堂関白記』と同じく「修善」は「修法」等の言葉と混用されることが多く、使い分けに明確な基準はなく、使い方には日記執筆者によって違いもあった。しかし、「修善」の意味するものは、除病や息災等の現世利益祈願を目的とした仏事が中心であったことは共通していた。「修善」の内容は、主に修法、壇等の密教の修法であった。 中村元『仏教語大辞典』（1981）では「修善」は、善を行うこと、善の行為と説明していた。今回取り上げた日記の「修善」の意味が、現代の辞典の意味と同じか否かを判断する材料を今は得られていない。但し、修法において仏を供養することが善に通じていたとも考えられる。一方、言葉の意味が変化して、修法を「修善」と呼称するようになった可能性も考えられる。以上のことから、当時の上流貴族の中では「修善」が善と考えられていたこと、そして「修善」が密教修法を意味するように変化したこと、その両方の要素を含んで使用された言葉だったのではないかと考える。
2．学術論文・学会発表等	①学術論文「平安時代後期における修善」『印度學佛教學研究』第69巻第1号、pp. 55-59、日本印度学仏教学会（2020年12月、査読有） ②学会発表「平安時代後期における修善」日本印度学仏教学会第71回学術大会、2020年7月4日オンラインリモートシステム開催。
3．今後の課題	「修善」という言葉は、道長の曾孫や玄孫の日記『後二条師通記』『中右記』等では使用例が減少しており、現世利益祈願の仏事は個別の修法名や「壇」「修法」等の直接的な名称を記すことが多くなっていた。この変化は貴族社会における修法の普及を鑑みながら明らかにする必要があると考える。そのため、来年度以降は道長の子孫達の日記の分析を行い、「修善」の展開を考察していく。